

四 百年以上の伝統をもつ、いわずと知れた町の特産品「上野焼」。四季の草木をモチーフに掻き落とし技法を用いて作った器、リアルな動物をモチーフとした器、SEA陶器のアクセサリーなどが並び、数ある窯元の中でも一線を画す存在感を放つ上野焼窯元「守窯」。現役の作家で窯主の熊谷守さんの下で、長女の光さんと次女の眞春さんが修行を積みながら作品づくりに従事しています。「親方(父)の影響で『上野焼とはこうあるべきだ』という枠にとらわれた作品よりも、自分



↑春の器制作に取り組む2人。新作は3月15日④から23日⑤に守窯のギャラリーで開かれる「春の器展」で販売する予定。



たちが作っていて楽しい!と思えるものを追求していきたい」と笑顔で浮かべる眞春さん。「そもそも上野焼はお殿様の御用窯。お殿様に喜んでもらえるよう当時の職人たちは常に斬新なものを作ったという歴史があります。そう考えると私たちみたいな枠にとられない作品があってもいいんじゃないかなって!」と光さんも続きます。まさに「三者三様、多種多様な作品が並び守窯。『いい意味で、おもちゃ箱をひっくり返したような窯元』と例えられることもあるといいます。「守窯では

子どもたちや若い女性、ご年配のかたまで幅広い世代の人たちが、日常使いしやすい器を生産しています。敷居が高いと思われがちな伝統工芸への意識のハードルを下げ、多くの人に上野焼を手にとってもらえるような作品づくりができれば」と目を細めた一人。上野焼へのリスペクト踏まえながらも、独自のアイデアや大好きが詰まった創作活動へ意欲を燃やしました。

守窯 住所▶福智町上野1991 電話▶0947-28-2757



INTERVIEW

熊谷光さん④／熊谷眞春さん⑤



楽心堂本舗 住所▶福智町金田946 電話▶0947-22-7288

INTERVIEW

大井哲子さん⑥
大井知子さん⑦



輝く界限 ② 伝統継承

伝統文化を受け継ぎ昇



↑代表取締役を務める知子さん⑦と、創業者で現在は会長を務める哲子さん⑥。個人向けの落雁も実店舗で購入できるほか、インターネットでも注文できます。

華する女性たち。

日本古来のものやこの地で花開いた伝統文化を継承するのは男性だけではない——。味・供物・器の分野で先人から受け継いだ技を守り、磨き、継ぎゆく三者にお話を伺います。

大 正10年に先代・小西一二さんが創業し、今年で105年を迎える「小西みそ」。田川郡で一番最初に味噌の製造販売を開始した福智町の名店です。現在は創業者の娘である、長女の伊都子さん、次女の淳子さん、三女の英子さん、四女の道子さんを中心に、父から受け継いだ伝統の味を守っています。元々は、全員上京して働いていたという四姉妹。三男四女の家で父が、娘達の適性を見込んだ父たつての希望で四姉妹が「小西みそ」を継ぐことに。「昭和50年に家業を継いでから、事務や製造、配達と、それぞれの得意な仕事を分担して頑張ったんだよ。本当、男勝りに働いてきたよね」とお互いを労ります。しかし、四姉妹が家業を継いだのは、まだまだ男性が社会の中心だった昭和だった中。「面と向かっては言わないけど、働く女に向ける目は冷たかったよね」と当時の社会情勢を振り返ります。「それでも私たちが力を合わせて伝統を今

↓保存料を一切使用しない、天然醸成でつくられる「小西みそ」。金田商店街内の実店舗で購入できます。



に伝えてくれたのは、父から受け継いだこの味を絶やしたくないという強い想いがあったから。四姉妹は声をそろえます。努力の甲斐あつて現在では寿司・和食「たちばな」(伊方)や「めし屋柏」(飯塚市)、「こぶたさんがころんだ」(北九州市)などの名だたる飲食店で採用されるなど、食のブームも認める老舗となった「小西みそ」。多くの人に愛されて本当にありがたいと手を合わせます。「この味を未来へと引き継げるように、体が動くうちは現役で働きたいね」。頼もしい看板娘たちは、笑顔のしわを浮かべました。

小西みそ

住所▶福智町金田664-5 電話▶0947-22-0406



INTERVIEW

小西伊都子さん④／小西淳子さん⑤／小西英子さん中央⑥／野見山道子さん中央⑦

仏

前に供えるための「落雁」を製造販売する楽心堂本舗。ひな菊や玉、梅などの落雁を使い、200種以上の多彩な色を用いた美しいデザインで装飾専用の「お供物らくがん」を販売しています。創業で現会長の大井哲子さん。「創業より少し前に勤めていた就労支援施設で『作業の1つとして落雁製造を』と考えゼロから学んだんです。でも高度な技が必要とされる落雁作りは自立支援に向いてなかったみたいで……。結局断念したんですけど、せっかく身につけた技術だし自宅で

続けてみようかなって思ったんです」と創業のきっかけを振り返ります。始めた当時、地元寺院に納品していたものが口コミで徐々に広がり、注文数もだんだんと増加。1人では生産が追いつかなくなっていた……。そんな時、東京に出ていた3人の子どものうちの、経営コンサルティング会社で勤めていた忠賢さんが「楽心堂の落雁作りやお供物文化こそ、後世の日本に残すべき伝統」と帰郷。平成18年に法人化を果たした後、母と忠賢さんの想いに賛同した長女の知子さんと次女の涼子さんも自主的に実家に戻り、それぞれのスキルを生かした活動で、現在まで地道に収益を上げてきたといいます。昨年9月、代表取締役就任した知子さん。「企業力をつけ、福智町といえば楽心堂といわれる会社になりたい」と今後の目標を語ります。娘の力強い夢に「私も生涯現役で子どもたちと楽心堂を支えたい」と哲子さん。それぞれの視点から見る1つの目標に向かって、2人は目を輝かせています。